

# 学校ボランティア通信

第6号

発行日2007年 6月20日

## 学校ボランティアの報告

法律学科4年 磯上恵介

### 内容

- ・学校ボランティアの報告  
磯上恵介
- ・ボランティアを通して  
感じること  
伊良部温野
- ・からかいを通じて  
みえてきたもの  
小野啓之

私は、今年の3月から浅間台小学校でボランティアをしています。校長先生をはじめ浅間台小学校の先生方には大変お世話になっています。まだ短い期間ではありますが、私が浅間台小学校で経験したことを報告したいと思います。

私は浅間台小学校で低学年を担当する機会が多いです。というのも、低学年の児童の中に落ち着きのない子がいるからです。ADHDやLDの子どもは授業についていけなくなりイライラした様子を見せたりします。落ち着きのない子どもたちは、授業中にじっとしていることができません。授業が円滑に進んで、子どもたちの力になるように、私は授業に集中できない子どもの側に寄り添い、一緒に授業を受けたりします。こうやって学校ボランティアをしていると、学校、授業、子どもたち、先生たちの様子を実際に見ることができて日々勉強になります。

小学校では毎日のように事件が起こります。それは大体が授業中ではなくて、お休み時間や、昼休みなど、先生が目を見ているときに起こります。先生が見ていないときに子どもたちの本当の姿が表に現れるからだと思います。先日こんなことがありました。私が休み時間に外で子どもたちと楽しく遊んでいると、1年生の男の子が大きな声で泣きながら私のほうへと歩いてくるのです。私はその異変に気がつき、すぐさまその子のもとに駆け寄り、なぜ泣いているのか尋ねました。

どうやらともだちと喧嘩をして腕を噛まれたとのことでした。私は男の子の腕を見てびっくりしました。みごとに歯形が腕にくっきりと残っていました。素人目の私から見てもこれはまずいと思うほどで、すぐに保健室で診てもらうことにしました。こんなにくっきりと跡が残るまで噛み付くなんて、噛み付いた子どもはそんなに腹立たしいことがあったのかと思います。何で噛み付いたのか尋ねてみました。返ってきた答えに私は拍子抜けしました。なぜなら、噛み付いたのが虫除けスプレーを貸してくれなかったという理由だからです。そんな些細なことが喧嘩の原因で、歯形が残るほど強く噛み付いた理由だったのかと思うとなんだかとても悲しくなりました。私は噛み付いた子どもを叱りました。しかし、ともだちを噛んだ子どもは、相手が貸してくれなかったから悪い、の一点張りです。このとき私は教師の仕事の難しさを知りました。相手の痛みを言葉でどう子どもに伝えればいいのか、どうすれば、噛み付いた子が、どんな理由であれ暴力を振るってはいけないということを理解できるのかについて私は考えましたが、良い答えが見つかりませんでした。噛まれた子どもは保健室で診てもらった結果、大事をとって、病院に行くことになりました。

こういった事件は小学校では毎日のように起こりうるのだと思います。学校でのこうした課題を真摯に受け止めて、また次に活かせるように今後もがんばっていききたいと思います。

## ボランティアを通して感じること

自治行政学科4年 伊良部温野

私は中学生の頃からずっと教師になりたいと思っていました。その気持ちは一度も揺らぐことは無かったのですが、その夢の為に何か行動を起こすということはありませんでした。しかしそんな時、大学の先生から小学校のATのボランティアを勧められ、心の奥で何か行動を起こしたいと思っていた私はボランティアをすることにしました。

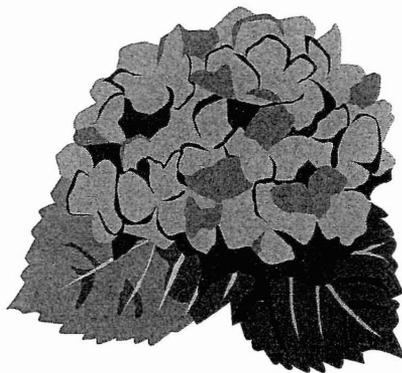
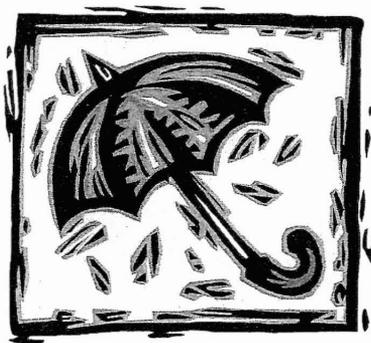
「先生」と呼ばれる立場で学校教育に関わることはもちろん初めての経験で、期待と緊張が入り交った中、初日を迎えました。その日の5年生の理科の時間、初めて児童に「先生」と呼ばれたことは今でも忘れられません。

ボランティアを始めて間もない私にとっては、学校現場で見るもの・触れるもの全てが新鮮で、それだけでも学ぶことは多いのですが、その感動を子どもたちと共感できるということが今の私にとっては幸せで、大きな意味をもつものだと感じています。

もちろん、学校現場は楽しいことばかりではありません。子どもたちは私とじゃれ合っているつもりでも、度が過ぎるとどこから注意すればよいのか悩む場面も多々あります。このような場面は今後も子どもたちと深く向き合えば向き合うほど増えてくると思います。しかし、そのような時には悩みながらも

そこからやりがいを見出せる人間になりたいと思っています。

まだまだ本当の先生方のように子どもたちを理解したり上手く対応したり出来ない部分も沢山ありますが、ATとして私は私なりに、子どもたちと関わっていき、そのなかで子どもたちの可能性をどんどん引き出していけたらと思っています。そして教師を目指す一人の人間として、一回り成長出来れば良いと感じています。将来、私が本当の教師になれた時は、このボランティアで始めて「先生」と呼ばれた時の感動を忘れず、その気持ちを大事にしている教師になりたいです。その為にも、今のボランティアで積極的に子どもたちと関わり、将来に生かしているよう多くのものを感じ取っていきたいと思います。



## からかいを通じてみえてきたもの

玉川大学 通信教育部 小野啓之

私は、昨年3月から寺尾小学校にATのボランティアとして参加させていただいている。このボランティアをはじめたきっかけは、小学校教員を目指すにあたり、教職に就く前に学校現場を見たり体験したりすることが、とても大切だと考えていたからである。ATをはじめ前にも、何度か宿泊体験のボランティアに参加したり、学童保育のアルバイトをしながら学校や子ども達とかかわってきた。その経験から私が思っていたことは、ボランティアやアルバイトは、現職の先生とは違い、とても近い距離で子ども達と接することができる、子どもの本音を聞くことができるという長所があることである。子どもに近い存在であることで、思いっきり遊んだり、話をしたりして、子ども達の笑顔を見ることができ。もちろん、指導がうまく伝わらずに、子ども達が言うことを聞いてくれないことも多々あるが、アルバイトやボランティアは、教職に就いたら経験できないような経験をする事ができる立場だと思っていた。

私のこのような考えから、ATを始める時は、学校現場に入るといふことの重要性、責任を意識しながらも、子ども達を笑顔にできるような先生になろうと思ひ、子ども達に受容的な態度で接した。子どもが声をかけてくれたらそれに明るく対応し、また、積極的にいろいろな子どもに声をかけていった。子どもとかかわっていくうちに、あることに気がついた。それは、子ども達はからかいを通じてかかわりを求めてくるということである。次に、私がからかいを通じて得たこと、感じたことを述べる。

からかいとは恐ろしいものである。初めは数人の子どものしか、からかいをしなかったのに、それが一度行動として認められると、真似をし、からかいを始める子が次々と登場する。どこかで歯止めをつけなければ、からかいはよりエスカレートする。私は活動に参加した初日目から、嘲笑されるようなあだ名をつけられ、それが学年全体に広まってしまったのである。私は、自分の子どもに対する対応を深く反省した。よいことはよい、悪いことは悪いと教えるのが教師の使命ではない

か。頭ではわかっていることだが、私は子ども達に嫌われたくない、という思いや、まず始めは人間関係づくりを大事にし、叱ることは最低限にしよう、と思ひ子ども達に接してしまつた。その結果が、「からかいを許す関係」「馴れ合いの関係」を生み出してしまつたことは言うまでもないと思う。しかし、後戻りはできない。私は、まずこのからかいを止めなければならない、と思つた。学校の帰り道や家に帰つてから、色々な人に相談したり、自分で考えたりした。「どうしたら子ども達はからかいをやめてくれるのだろうか？」私は、この問題を解決することが何よりも大切だと考えた。「もし次に言われたら厳しく注意しよう。せめて、やめようと言かけをしなければ」と自分に言い聞かせ学校に行く。しかし、実際子ども達に会うといつも通りの対応になつてしまふ。私はこの悪循環に悩まされ、日々どうしたらいいのか悩んでた。徐々に子どもへ冷静な対応がとれるようになると、少し声かけができるようになった。きつく叱るのではなく、今自分が思っていることを子どもに伝えようと思ひ、行動するようになった。学校で子ども達に出会うと、まずからかいの一言が飛んでくる、すると、「今なんて言ったの？その呼び方はやめてほしいな」と言えるようになった。そして今、最も多く活動をともにしている5年生の学級でのからかいは減少している。しかし、未だにからかいを通じてかかわりを持つとする子も存在する。

からかわれながらも、長い期間を通して子ども達とかかわり、とても良い関係が築けていると思ふ。例えば、休み時間に一緒に遊んだり、ちょっとした悩みを聞いたり、掃除をしたり、一緒になって叱られたり等様々である。子どもと一緒に活動することはとても楽しい。そんな子どもの姿を見ていると、子どもは、本当に悪意をもって私をからかっているわけではないことがわかる。偉そうな言い方だが、私とかかわりを持つための手段としてからかいを選んでいるとも言えると思ふ。

このような活動を通じて、子ども達にとってのATの存在がどういふものなのかが見えてきた。約1年ATとして活動して強く感じることは、子ども達は鋭い目を持ち、大人の立場を見抜くということである。当然のことであるが、ATはボランティアとしての先生なので、教科の指導もしなければ学級も担当していない。また、正式な先生ではない、大学生である、ということ子ども達はよくわかっている。また、人格や性格を読み取るのもとてもうまい。先生によって態度や行動を変えることができる。これは子どもの才能とも言えるかもしれない。そんな賢い子どもに、ATは1人の先生として何ができるのか。その答えはまだ明確には出ていない。しかし、私は、漠然とありのままの自分で子どもに接するのが良いと今考えている。もちろん間違った指導をしてはいけないが、着飾らず、学級の先生がやるべきことは先生に任せ、先生が子どもとかかわれない時間、子どもとふれあう。そして何よりも先生ぶらず、自分らしく子どもに接し、子どもの声に耳を傾けることで、学校にいる子どもたちの生活がより良いものになれば良いと思い、これからも活動を続けていきたい。

### 神奈川大学 教職課程指導室

電話 0454815661  
FAX 0454134154  
Email: educ@kanagawa-u.ac.jp

